

Title	会話の応答におけるメタ言語表現の使用：会話展開への言及
Sub Title	
Author	田中, 妙子(Tanaka, Taeko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2020
Jtitle	日本語と日本語教育 No.48 (2020. 3) ,p.19- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20200300-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

会話の応答におけるメタ言語表現の使用

—会話展開への言及—

田 中 妙 子

1. はじめに

田中（2018）では、会話におけるメタ言語表現の機能を分類する端緒として、聞き手が応答する際、相手の発話の何に注目してメタ言語表現を用いているかを概観した。その後、用例採取を更に行い、その多様性に触れるとともに、「メタ言語表現とは何か」という最初の問いに立ち戻ってしまうことを実感した。

田野村（1996）は、メタ言語の正確な定義の難しさは、形式論理学から生まれたこの用語・概念を言語学における自然言語の研究に類推・拡大する時のあり方が多様であることに起因すると述べている（p. 11）。田野村が指摘するように、「メタ言語」という用語を用いることの意味は、「メタ言語という観点に立つことによってうまく説明できる興味深い言語事実をどれだけ発掘し分析して見せることができるか（p. 17）」という点にかかっていると考えるべきであろう。本稿ではこの指摘に学び、改めて会話におけるメタ言語表現の具体例を観察することによって、人々が言語コードを用いた表現意図の伝達を行う以外にコードそのものへの言及を行うことで、重層的な伝達行為を実現していることを明らかにしたい。

2. 研究対象と用語の定義

田中（2018）ではメタ言語表現を「自分または相手の用いる言語コードについて言及する表現」と定義し、会話において聞き手が相手の発話に言

及するメタ言語表現の用例をシナリオの中から広く収集して、人々が自分たちの会話をどのように捉えているかを探った。多様な用例を観察すると、その言及する先は、発話の中のある語句や表現、話題、表現の調子、音声、会話の展開方法など多岐にわたることが分かる。そこで本稿では、その中で特に会話の展開方法について言及するメタ言語表現を取り上げる。

田中（2018）と同様、分析の記述のため、会話参加者の一方が何らかの発話を行い、もう一方がその内容に応答するという発話連鎖を「第一発話」と「応答」に分ける。そして、第一発話を行う者を「第一発話者」、それに対して応答する者を「応答者」と呼ぶ。分析は「応答者」が「第一発話者」のどのような点について言及したかに注目して行う。なお、「第一発話者」は基本的には「応答者」に向かって発話をするが、三者以上が参加する会話の場合はそれに当たらない場合もある。つまり、発話者 A と発話者 B がやりとりをし、それを同じ会話の場で聞いている発話者 C（＝応答者）がやりとりに参入して、発話者 A、または発話者 A と B の発話に対して何らかのメタ言語表現を発するという場合があるということである。また、「第一発話」は必ずしも一回のターンとは限らず、複数のターンによって構成されることもある。

3. 分析

会話展開という点から応答者が言及することについて大きく次の四つの点が観察された。

- (1) 第一発話者の発話の順序・タイミング
- (2) 第一発話者の発話と応答者の予想とのずれ
- (3) 第一発話者の話し方
- (4) 第一発話者の発話を含む会話の概観

以下に具体的な用例を示しながら分析していく。

なお、用例は、問題とするメタ言語表現を実線の下線で示し、説明の必

要に応じて他の下線と数字も使用する。また、[] に筆者が内容理解のための補足情報を加え、【 】に用例の略称を記す。略称の一覧は稿末に記す。

3-1 第一発話者の発話の順序・タイミング

会話参加者は通常、互いに協力し合って会話を一つの方向へ進めようとしていくが、時として第一発話者と応答者が想定している会話の進行に発話の順序やタイミングの面で混乱や齟齬が生じ、会話が円滑に進まなくなることがある。そのような時に、応答者が第一発話者の注意を喚起したり、実際に会話の軌道修正をしたりすることを試みるためにメタ言語表現を用いることが観察される。

- 例 1 [正和、朝、居間に来て座る。「本気搾り」は宗貴が和代に黙って入荷した地ビールの名前。] 和代「なんで黙ってたの？」正和「え？ 何いきなり… ああ、雑巾搾り」宗貴「おい！…本気搾りだ」【ゆとり 75】
- 例 2 [真琴が身の上話をし終わったところで] 樋口「趣味とかは」耕介「なんだよ、いきなり」樋口「いいじゃねえか、趣味くらい聞いたって」【今夜 71】
- 例 3 [知人の話をしていたところで拓自が織江が独身かどうかを聞く。]拓自「いま、ひとり？」織江「え？」拓自「一人じゃないよね」織江「急に聞かないでよ」拓自「一人？」【ナイフ 33】

例 1～3 は第一発話者の会話開始・話題提供のし方が唐突であることに応答者が言及している。例 1 のように会話開始部で起きる場合と、例 2、3 のように会話途中の話題提供部で起きる場合が見られる。

- 例 4 [耕介は好きな女性に花をあげるを言いたくないので、部長の妻にあげるという嘘をついた。] 樋口「花はよしたほうがいいんじゃないか、気障だったらしいぜ」耕介「花でいいよ。高いもんじゃなくて」樋口「ばかだな、花は高いんだよ。チョコレートにしろよ」耕介「……花を贈るように言われてるんだよ、部長に」樋口「……それ、先に言えよ」耕介「もういいよ」【今夜 120】
- 例 5 [耕介は好きな女性が家に来ていることを樋口に言いたくなく、

嘘をついた。] 耕介「だまして悪かった」樋口「やっぱ嘘か」耕介「理由があるんだ」樋口「俺が嫌いなら嫌いだってはっきり言っていいいんだぞ」耕介「実は、これから、川上さんと食事なんだ」樋口「……（驚愕）」耕介「家に彼女が来てるんだ」樋口「やったじゃねえか」耕介「そうなんだ」樋口「そういうことなら早く言えよ。だったら俺、泊まりに行けるわけないだろ」耕介「ごめん」【今夜 64】

- 例 6 [麻生の息子の話題が終わり別の話に移ったところへ麻生が駆けつける。] 麻生「すいません…（正和に）倅がお店にお邪魔しているようで」正和「その話今終わったとこ」麻生「え？」【ゆとり 60】

例 4～6 では第一発話者の発話のタイミングが遅すぎるということに応答者が言及している。例 4、5 は会話の展開の中で情報提供のタイミングが遅かったこと、例 6 は会話に参加して発話を開始するタイミングが遅かったことを指摘している。

- 例 7 [正和と山路が、山路の目の前を女性がカーディガンの前を手で合わせて通り過ぎたという話をしている。] 正和「見たの？」山路「見てないよ、見る前に前をこうされたんです」麻生「見ようとしたんじゃないですか」山路「なんだよ入ってくんなよ」正和「意識し過ぎて変なことになってんのかな」【ゆとり 61】

- 例 8 [樋口と真琴がプロレスの話で盛り上がっている。] 耕介「馬場は？」樋口「うるさいな」耕介「馬場は、あの歳で、なんでまだ戦ってるの？」樋口「……」耕介「ホントに強い、馬場は」樋口「馬場さんのことは言うな」真琴「そうよ」樋口「あの人はあれでいいんだ」真琴「知らないくせに、口出さないでよ」樋口「そういう奴が一番腹立つんだよ」集中砲火を浴びる耕介。樋口「お前は黙って食ってろ」耕介「…（悲しい）」【今夜 73,74】

例 7、8 では第一発話者の割り込み発話に応答者が言及している。例 7 の第一発話者は応答者にとって会話に入れたくない存在、例 8 の第一発話者は応答者にとって目下の話題を語るのにふさわしくない存在と認識されており、そのような存在である第一発話者が会話に割り込んで発話したことを非難している。

- 例 9 [山路が女性に避けられているかどうかという話題] 山路「どうすかね、僕も経験ないから」麻生「経験ない？」山路「避けられてるとしたら、諦めた」

方がいいよね」麻生「経験ないって?」山路「いいから、さらっと流して
(正和に) どう思う?」正和「だけどさ、そもそも向こうから告白して来て
…経験ない?」山路「もう、流れそうだったのに!」【ゆとり 61】

例 10 [宮下は、恋人である正和が以前にとった行動に怒っているが、正和はそのことに気付いていない。] 宮下「お友達は?」正和「漫喫泊まるって…小学校の先生なんだ、ていうか…なんで携帯変えたの?」宮下「その前に謝ってよ」正和「ああ、ごめんなさい」宮下「なにが?」正和「え? ああ…えーと(言葉が出て来ない)」【ゆとり 30】

例 11 まりぶ「頭来るわー、やっぱシメときゃ良かったわ、おいブス!」宮下「あ!?!」まりぶ「あんた偉い人なんだろ? なんとかしろよ!」宮下「その前になんて言ったよ今!」まりぶ「ブスって言ったよ」【ゆとり 102】

例 9~11 では第一発話者の発話が応答者の関心事とは異なる方向へ進行していることについて応答者が言及し、方向を修正しようとしている。

例 9 では ~~~~ と _____ の部分の二つの話題が同時に進行している。前者は「山路が女性に避けられているかどうか」についての話題、後者は「山路が女性と交際した経験がない」ということに対する麻生と正和の驚きが話題である。応答者(=山路)は後者の話題を避け、前者について会話を進めたがっているが、第一発話者(=前半は麻生、後半は正和)が後者の話題に関心を持ってしまう。そのため、応答者は前者の話題を「さらっと流して」次に進むようにと指示したが失敗し、「流れそうだったのに(流れなかった)」と不満を述べる。

例 10 の応答者は、第一発話者が以前にとった行動に関心があり、例 11 の応答者は第一発話者が直前に発話した言葉に関心がある。しかし、第一発話者がその話題に触れずに会話を進めてしまったため、応答者は自分の関心がある話題に会話を戻そうとする。

3-2 第一発話者の発話と応答者の予想とのずれ

会話の各参加者は、それぞれの社会的経験を通して、様々な言語行為がどのような要素を含み、どのように流れていくかということについて個々

に規範や固定観念を持っている。「ある事柄は一般的にこのように話されるべきだ／話されるものだ」という認識のようなものである。メタ言語表現における第一発話者と応答者の関係においても、応答者が会話参加者の一人としてそのような認識を持ち、会話がどのような方向へ展開するかをある程度予想しながら会話を進めることがある。しかし、実際には第一発話者の発話が応答者の認識に合わず、応答者の予想と大きくずれてしまう場合がある。そのような場合に、応答者はメタ言語表現を用いてずれに言及し、自分と第一発話者との認識の違いを示すことがある。

例 12 [拓自は織江の店で知人の青年を使ってもらいたいと考えているが、織江は青年を他の場所で自立させた方がよいと考える。] 拓自「あんたの店を知らないが、しばらく使って貰えないか、というようなことを考えた」(中略) 織江「若い人が自分で出て行くの、いいんじゃないの」拓自「金を持っていない」織江「いくらかあげるなり貸したりすれば」拓自「それですめばいいが——」織江「どうして、すまない？」拓自「そんなに簡単じゃないんだ」織江「どういうこと？」拓自「いえないよ」織江「人に物を頼んでそれはないでしょ」拓自「いえないことはあるだろう」【ナイフ 33】

例 13 [香はデートに遅れた村上に腹を立てている。] 村上「待った？」香「……約束何時だったけ？」村上「9時」香「今は？」村上「……9時21分」香「……待ったかどうか聞かなきゃわかんない？」村上「いや、20分……」香「私は5分前に来たから、正確には26分だけどね」村上「そっか……」香「そっかじゃなくて。あのさ、遅れるなら遅れるで普通連絡するよね？」村上「いや、少しでも早く向かった方がいいかなって思っ……」香「てかさ、さっきからなんで謝らないの？ まだ謝ってないよね？」村上「え？」香「普通、遅れて来たらまず謝るよね？ それから『待った？』じゃない？」村上「ああ、そっか。ごめん」香「秀樹ってさ、基本、謝らないよね？」村上「いや、今謝ったじゃん」香「言われてからやっつとじゃん」村上「……ごめんごめん……あ、それよりさ……」香「え？ 待って、なにそれ？」村上「え？」香「遅れて来といて、『それよりさあ』ってなに？」村上「……あ、いや」香「私が『それよりさあ』って言うならわかるけど、待たせた側が言う台詞じゃないよね？ よく今の流れで『それよりさあ』っていけたよね」村上「……いや、悪かったっつってんじゃん。もう待たせないから」【素敵 54, 55】

例 12、13 では、応答者はそれぞれ「人に物を頼む時は、相手に聞かれ

たことに答えて情報提供をするものだ」「遅刻をして相手を待たせた時は、まず謝罪をし、相手に配慮した表現を用いなければならない」というような言語行動に関する認識を持っているが、第一発話者がそれに沿った発話をしなかったため、相手の発話に言及し、その非常識さを非難している。

例 14 [真琴が頭髮の薄い耕介にドライヤーのことを質問する] 耕介「僕はドライヤー、あんまり使わないんで」真琴、耕介の頭髮の薄さに初めて気付く。 真琴「ごめんなさい」耕介「……そこで、ごめんなさいって言わないで欲しかったなあ」【今夜 32】

例 15 [樋口は、耕介が知り合った女性を自分に紹介してほしいと言う。] 樋口「紹介してくれよ」耕介「駄目に決まってるだろ」樋口「なんで」耕介「ロクなことないから」樋口「そんなことよく言うよ。かわいいのか？」耕介「美容院でアシスタントやってる」樋口「答えになってないよ」【今夜 20】

例 14、15 では、発話の隣接ペアに対する発話者の違和感が言語化されている。例 14 はドライヤーを使わないという単なる情報提供に対してわざわざ謝罪をする、例 15 は相手の質問に対して直接的に答えないというように、第一発話者の発話が隣接ペアとして不適切であることに応答者が言及し、自分の予想とは異なる反応に不満を示している。

例 16 [山路と正和は酒を飲んでいる。] 山路「ピッチ早いっすね」正和「氷入れてっから、山ちゃんも何？ ソワソワしてっけど」山路「ええ!？」正和「ソワソワっつーかニヤニヤ？ 聞いた方がいいやつ?」山路「告白されてしましまして」正和「まだ聞いてないけど」【ゆとり 38】

例 17 長井「これわたしの友達の話なんだけどね」咲江「え？」長井「わたしの、娘の友達の話なんだけどね」若井「さっきとちょっと違いますよ」長井「さっきのが間違え、なんかね、その友達の所に泊まりに行ったんだけど」咲江「怖い話ですか？」長井「そうよだから」若井「あそれ知ってる」長井「えなんで？ まだ話してもない」若井「有名ですよその話、ノコギリ持った男がベッドの下にいる奴ですよ」【徒歩 39】

例 18 大槻「かおりさーん、ちょっと相談あるんだけどー」かおり「え、やだ」大槻「ちょっとちょっと、まだ話してないでしょ」【神聖 40】

例 16～18 では、それぞれ 部分の質問、情報提供、依頼という言語

行為と、 部分の第一発話者の反応が逆転しているということに応答者が言及し、違和感を示している。

例 19 安喜子「私は——アニメのシナリオライターに、なりたいんです！」月島を前に宣言する安喜子。ぼかんとしている月島。月島「なるほど……で？」
安喜子「え、で、って。あの……それは。できれば、監督と一緒にお仕事させていただけませんか……」【学校へ 38】

例 19 では、「シナリオライターになりたい」という宣言に対して強い反応を示さず「で？」と軽く促すだけの第一発話者に対し、より強い反応を予想していた応答者が第一発話者の発話を繰り返すことによって違和感や物足りなさを示している。

3-3 第一発話者の話し方

会話を展開するためには円滑な発話が必要であるが、そこに支障が出た時、応答者が第一発話者の話し方について言及する場合がある。発話が続いていく際のポーズや中断、情報量などに関する言及が観察される。

例 20 [山路が正和の恋人を「茜ちゃん」と呼んだ。] 正和「あんたが黙って……ていうか、茜ちゃんてなに!？」山路「え？」正和「茜ちゃんて呼んだよね、山路くんさっき、茜ちゃんのこと、まあ、茜ちゃんただけどさ、でも茜ちゃんて呼ぶ？ 茜ちゃんのこと、たった1回遊んだだけで」山路「え？ ああ、そっすね」正和「え、それだけだよ」山路「あー……うん、ごめんごめん」正和「え、なに今の変な間」まりぶ「誰？」山路「茜ちゃん？ 彼女」正和「だからさあ!」【ゆとり 99】

例 21 伊上「おまえの言ったことずっと考えていたんだけどな」琴子「なに？」伊上「母親を作家の目線で書くか息子の目線で書くか」琴子「おとうさんは作家の目線でいいのよ」ふふっと笑う伊上 伊上「ぼくが生まれて初めて書いた詩は——やめた」琴子「言い出してやめないでください」伊上「そのうちエッセイで書くから読め」【わが母 36】

例 20 では第一発話者の「あー」と「うん」の間にあるポーズ、例 21 では第一発話者の「——やめた」という発話の中断に言及し、本来滑らかに発

話されるべき文にポーズや中断が見られることから感じられる違和感や不満を示している。

- 例 22 晶「一つ、不躰なこと聞いていいですか」恒星「いやです」晶「ですよ。すいません」恒星「はい」斎藤「終わり？ なに？ なに聞きたかったの？」晶「いえ」【獣に 66】
- 例 23 [真琴が身の上話をする。長くなると言っていたが、予想外に短かった] 真琴「これ、生クリームかけたほうが絶対おいしい」耕介「それで？」真琴「え？」耕介「それでおしまい？」真琴「そうよ」【今夜 71】
- 例 24 [銀行員が先ほどから話を続けている。] 銀行員 1「——アメリカに独占されている医療ロボット市場に参入していこうという社長の攻めの姿勢、個人的には素晴らしいと感服しているのですが、ただ、その……」隆「時間の無駄です」穏やかな表情で、隆、銀行員たちに、隆「簡潔に答えだけで。今回お願いした融資の件は、どういう結論に？」銀行員 1・2「……」と顔を見合わせた後、同時に頭を下げる。銀行員 1・2「申し訳ありません、社長」隆「……」【嘘の 20, 21】

例 22～24 は情報量に関わる言及である。例 22 は第一発話者（＝晶）と他の会話参加者（＝恒星）との「質問－答え」のやりとりが短すぎ、第一発話者が必要な答えを得ていないため、そばで聞いていた応答者（＝斎藤）がその短さと第一発話者の質問の意図について言及している。例 23 は第一発話者の説明が短すぎて情報が不十分であること、例 24 は逆に情報過多のため、簡潔な話し方をすべきであることを指摘している。

3-4 第一発話者の発話を含む会話の概観

第一発話者を含む参加者がそれまでに行ってきた会話の展開を応答者が把握し、その内容や流れを概観する場合である。

- 例 25 琴子「瀬川君はどうしてそんなに遠慮深いの？」と自分のグラスを押しやる。瀬川「性格ですね。実にくだらない。（とグラスをあおる）僕にははっきりとあなたという人間の心が掴めません」琴子「こういう会話、おとうさんの初期の小説にあったよ」【わが母 31】
- 例 26 [ぶりおは世話になった教授の話をしているが、周りは笑子の話だと誤解する。] ぶりお「オレ、今、気づきました」笑子「（シーシー）あん？」ぶり

お「オレ、好きなんだなって」笑子「へ？」みんな、笑子を見る。笑子「いやいや、何言ってるの、ダメだよ、こんなところで」ぷりお「世間が何と言おうと、好きなんですよ、オレは」笑子「(声、高い) ぶッ、ぶッ、ぷりおさん？」[中略] 鷹子「えっと、誰のこと言ってるのかな？」ぷりお「え？ ああ、いっしょに研究していた教授です」笑子「データ改ざんした、インチキ教授だよ」日出男「なーんだ、ばあちゃんのことかと思った」ぷりお「(仰天) え？」日出男「ばあちゃんもその気になってたよな」笑子「なるわけねーだろう。こんな青二才に」ぷりお「えっと、なんで、そーなるんですか？」愛子「だって、そーゆー流れだったじゃん」ぷりお「流れ？」鷹子「場の流れ」ぷりお「はあ」笑子「インテリはめんどくせえんだよ」【富士 103, 104】

例 25 では琴子と瀬川によるやりとりの内容が父親の小説に似ていることを応答者 (=琴子) が指摘している。例 26 では第一発話者 (=ぷりお) の _____ 部分の発話を含む一連のやりとりの内容が皆の誤解の原因であったことを応答者 (=愛子、鷹子) が説明している。このように、応答者が第一発話者の発話を含む一連の会話の流れや内容を概観し、それに関して言及するという例が観察される。

4. まとめ

以上、会話において、その展開方法に言及する表現をメタ言語表現として取り上げ、分析を行った。林 (1978) は、メタ言語機能は「何かの状況から、表現の中の『ことば』を意識させること」であるから、「普段のことばのやりとりでは、メタ言語機能は働かないのが正常で、働けば、むしろ異常というべきである」と述べている (p. 54)。その指摘のとおり、用例に見られるメタ言語表現の多くは、相手の発話の異常に対する違和感に言及し、それを修正・調整するために不満を述べたり、具体的な要求を出したりするものとして機能している。ただし、このような応答者による修正・調整の試みは、成功する場合もあれば、第一発話者によって無視される場合もあり、また、成功しても応答者の期待どおりには会話が進行しない場

合もある。メタ言語表現は、相手や自分の理解を助け、相手への配慮を示すという機能が教育的観点から論じられることが多いが、日常会話においては参加者同士の人間関係の様々な葛藤の中で、言葉によって自分を守り、正当化するための手段ともなっている。シナリオを言語研究の用例として扱うことには長所・短所があるが、人間関係の葛藤を描くものが多いという点から見ると、メタ言語表現の研究に一つの視点をもたらすのではないかと考える。

用例資料

- 【今夜】三谷幸喜(1998)『今夜、宇宙の片隅で』第1回～第4回 フジテレビ出版
 【ゆとり】宮藤官九郎(2016)『ゆとりですがなにか』第1話～第4話 KADOKAWA
 以下、シナリオ作家協会編『年鑑代表シナリオ集』所収
 【毎日】真辺克彦「毎日かあさん」(2011年版)／【神聖】入江悠「劇場版 神聖かまってちゃん ロックンロールは鳴りやまないっ」(2011年版)／【大鹿】荒井晴彦・阪本順治「大鹿村騒動記」(2011年版)／【わが母】原田真人「わが母の記」(2012年版)
 以下、映人社『ドラマ』所収
 【ナイフ】山田太一「ナイフの行方」(2015年2月号)／【徒歩】前田司郎「徒歩7分」第1回～3回(2015年7月号)／【素敵】バカリズム「素敵な選 TAXI」第1話(2015年7月号)／【嘘の】後藤法子「嘘の戦争」第1話・第2話(2017年2月号)／【富士】木皿泉「富士ファミリー 2017」(2017年2月号)／【学校へ】岡田磨里「学校へ行けなかった私が『あの花』『ここさけ』を書くまで」(2018年11月号)／【フェイク】野木亜紀子「フェイクニュース あるいはどこか遠くの戦争の話」前後編(2018年12月号)／【獣に】野木亜紀子「獣になれない私たち」第1話(2018年12月号)／【ゴールド】鳴尾美希子「ゴールド!」(2018年12月号)

引用文献

- 林四郎(1978)「メタ言語機能の働く表現」『文藝言語研究言語篇』3
 田野村忠温(1996)「メタ言語とは何か」『日本語学』15-11
 田中妙子(2018)「会話の応答に見られるメタ言語表現—シナリオを例として—」『日本語と日本語教育』46

参考文献

- 杉戸清樹 (1983) 「待遇表現としての言語行動—『注釈』という視点—」『日本語学』2-7 明治書院
- 杉戸清樹 (1989) 「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8-2 明治書院
- 古別府ひづる (1997) 「研究報告場面における留学生のメタ言語表現: 口頭発表教材のシラバス化の可能性を探る」『山口県立大学国際文化学部紀要』3
- 西條美紀 (1999) 『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 中井陽子・寅丸真澄 (2010) 「講義の談話のメタ言語表現」『講義の談話の表現と理解』第8章 くろしお出版
- 李婷 (2013) 「メタ言語表現の『文脈展開機能』」『早稲田日本語研究』22
- 佐々綾子 (2015) 「コンフリクト時に使用される日韓のメタ言語表現に関する研究」『日本語学研究』45 韓国日本語学会
- Jakobson, R. (1980) *Metalanguage as a Linguistic Problem. The Framework of Language.*
- 池上嘉彦・山中桂一翻訳 (1984) 「言語学の問題としてのメタ言語」『言語とメタ言語』勁草書房
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language.*
- 南出康世・内田聖二翻訳 (1989) 『談話分析—自然言語の社会言語学的分析』研究社出版